6

日本で最初の看護婦留学生とセント・トマス病院

芳賀佐和子・住吉蝶子・平尾真智子

日本で最初の看護婦留学生として英国セント・トマス病院に派遣された東京慈恵医院看護婦教育所生徒の林徽音、那須セイについては不明な点が多い。先行研究として東京慈恵会『慈恵看護教育百年史』（一九八四年）、平尾「ウィリアム・アンダーソンと東京慈恵医院看護婦教育所の看護婦留学生について」『医譚』（一九九一）などがある。今回ロンドン・メトロポリタン・アーカイブスのセント・トマス病院関係史料を中心とした資料から、これらの留学生に関して新たな知見が得られたので報告する。

東京慈恵医院看護婦教育所はセント・トマス病院医学校に留学した医師高木兼寛によって創設された。日本で最初の看護婦留学生の派遣（一八八七から一八八九年）にはセント・トマス病院の外科医で日本の海軍軍医の教育のため来日し高木兼寛の恩師でもあったウィリアム・アンダーソン（William Anderson, 一八四二〜一九〇〇）医師が関与している。彼が日本での仕事を終え英国に帰国後、ナイチンゲール基金の秘書官であったヘンリー・ボナム・カーター（Henry Bonham Carter）へ宛てた一八八七年の手紙が保存されている。この手紙の存在とその一部については既に報告したが、今回は完全な形で資料を得ることができた。

手紙の主旨は高木によってセント・トマス病院に派遣された二人の日本人看護婦留学生をナイチンゲール・ホームに受け入れてほしいというものである。この資料から二人の留学生はセント・トマス病院で学んだ外科医高木医師によって派遣されたこと、セント・トマス病院は日本の外科医の新しい教育のセンター的役割を果たしており、卒業生は政府の要職についていること、二人の派遣の目的はセント・トマス病院の看護制度を日本に採用することであること、二人は不慮の事故により入学に必要な正式の人物証明書を所持していないが自分が身元保

証人になること、セント・トマス病院以外の病院での訓練は意味がないと考えられること、などが判明した。またセント・トマス病院職員給与支払簿には日本から派遣された二人に給与は支払われていないことから、病院職員の扱いではないことがわかった。またこの手紙にある「不慮の事故」とは日本側の資料から、二人が日本から英国までの帰国の航海に同行した病気の宣教師ハリソン（F. Harrison）夫人が航海の途中で死亡したことであることが判明した。（『女学雑誌』六九号、明治二〇年、Japan Weekly Mail 1887.7.30）。林徽音は留学から帰国後、慈恵医院を取材にきた『女学雑誌』の記者にセント・トマス病院の写真をみせ、病院や英国の看護の状況を話している（『女学雑誌』二二一号、明治二三年）。さらにセント・トマス病院の年報には高木医師が卒業後、毎年セント・トマス病院に寄付金を送付しており、卒業後もセント・トマス病院との関係が継続していたことが明らかとなった。

今回の研究から、セント・トマス病院の医師で高木兼寛の恩師でもあるアンダーソンが高木医師から二人の看護婦留学生を依頼されていたこと、二人の派遣の目的はセント・トマス病院の看護制度を日本に採用することであったこと、不慮の事故により人物証明書がなくナイチンゲール学校の見習生としての受け入れが難航していること、などが明らかとなった。二人の身分は、ナイチンゲール学校の卒業生名簿に名前が載っていないことやセント・トマス病院の職員の扱いではなかったことを考え合わせると、セント・トマス病院の「研修生」という形で留学生活を送ったものと推察される。

（東京慈恵会医科大学医学部看護学科）